

第53回神奈川建築コンクール 住宅部門 審査総評 審査委員 福江 裕幸

衣食住という。服飾や料理の「作品」としての出来ばえも、人が着用し、人が味わってはじめてその真価が表れる。茶道具などにも「用の美」がある。用いられることで一層その香気表れる。住宅建築も同様だ。あらためてこの基本に思い至った。その意味でも現地審査は大切である。ことに素人審査員の私にとって、「住んでみたくなる感覚」の度合いはなにかんづく重要な選考尺度で、ゆえに17件の現地審査にはすべて参加する必要があった。

とはいえ、一方で住宅建築は大いなる「作品」に違いない。それも理想郷で何不自由なく悠々とキャンパスに向かうような独善の作ではなく、地形や予算、施主の好みや望みといった多くの条件、制約を勘案し、吸収し、咀嚼しながら最善を尽くす苦心の作だ。住宅建築はもとより自他、彼我を区切って閉じこもるだけの造作ではない。目指すべきは閉鎖よりも開放、暗がりよりも明るみ、個別よりも共有。そのように一般の見方や考え方も変わってきたようだ。周辺の自然環境や地域社会に受け込む努力にも怠りがない。

そうしたなかで、「住宅」と「生活」のかかわりは一層濃密になったように思える。住宅はそれぞれの生活をはぐくみ、慈しみ、その喜びを支援するための容器、仕掛けとして、これまでにない使命感のような意識を帯びてきているのではないだろうか。もっと言えば、住宅のありようには新しい生活スタイルを逆提案するような発展形が求められる時代になってきてはいないだろうか。

前置きが長くなったが、現地審査では、生活への寄り添いと作品へのこだわりという二面性、相反する底流のようなものを確かに感じた。それは応募作品に限らず、今日の建築という現業が持つ「せめぎあい」なのかもしれない。

目立ったのは、家族同士の交流を大事に、お互いの気配を感じ合えるよう願った設計である。「a cabin」(鎌倉市)は海を臨む高台にあって、航行する船と船室をイメージした。「すべての視線が合うようなフロアレベル」は、家族一体化の求心力を浮かび上がらせようとしている。その半面で、一人ひとりの心を沈ませ癒す暗がりの個別スペースも用意。光と影との行き来の中に、団欒づくりの伏線を張った。

「深見の住宅」(大和市)は二階建てながら、画然とした上下の階層で空間を仕切らず、家族が緩やかに無理なくつながり合うような多重構造を工夫した。相互にずれた床レベルがそれぞれに面白いステージ感覚を呼んで、生活を楽しむ応用性を有していた。

逆に「鷺沼の家」(川崎市)は、作品へのこだわりに傾斜した物件に見えた。平行でない平面が向かい合う不思議な曲折感。そのうちに目指した「伸縮性の感じられる内部空間」は、

「あるあいまいさの中の異質」という説明同様に難解で、生活の利便性がどう追いつくのかはよく分からなかった。

また、設計の先進性を生活が消化しきれず戸惑って見える例もあった中で、設計思想を見事に凌駕したかのような生活にも出会えた。「反町の家」(横浜市)は丘陵地にあつて、広角な眺望が財産。多くのデッキをしつらえ、視覚を遮るものを大胆に排して、空を仰ぐ楽しみも室内に取り込んだ。

それだけに生活の場としては手ごわいと思わせたが、実際、そこに住む家族は明るくエネルギーギッシュ、いっそ野営感覚で受け入れているようにさえ思えて好ましく頼もしかった。生活と住宅建築双方のパワーがうまく出会い相乗りしていく幸せを感じた。

さて、紙幅も残り少ないが、まだ触れておかなければならないものがある。その一つは県産材を使った応募作がいくつかみられたことである。「近くの山の木で建てる家」(横浜市)は文字通り環境保全の今日的テーマを体現した物件で、金具を用いない日本家屋の伝統工法にも則っている。その上で畳を一切使わずに違和感のない生活の場を生み出すなど、いわゆる守旧派だけではない気骨、発展性が感じられて好感が持てた。

「ライトシェルフのパッシブソーラーハウス」(相模原市)はバリアフリーの知恵を集め、車椅子生活者へのきめ細かく、温かい目が行き届いていた。四季の気温や光の変化を読み込んだシステムをはじめ、夜も寢息の聞こえるような造り。在宅介護の用を見据えた設計に時代の先取りを見た。